

友松対談 ⑫

昨年(平成25年)の11月30日(土)に、国大教育学部18期生の第1回の同期会が横浜で開かれました。この学年の方たちは国大紛争の渦中に巻き込まれ、大変な経験をした

人達です。いろいろな困難を乗り越えて、卒業後43年ぶりに同期会を開催したのだそうです。開催までには、いろいろな困難があり苦労があったことでしょう。



野村啓子さん 近影

中心となって会の実現に尽力された野村啓子さん(昭和45年国語科卒)に、今年(平成26年)2月に同期会実現までの経過をうかがいました。以下がその時にお聞きした話です。

43年目に、初めて開いた同期会

語り手 野村 啓子 (昭和45年-1970 卒)
聞き手 黒川 鈴谷 (昭和35年-1960 卒)

黒川 本日はお忙しいところをありがとうございます。同期会当日に至るまでの経過を綴った資料を拝見しましたが、大変なことを良くおやりになったとまず敬意を表します。今回の同期会が、卒業後初めての会なのですね。

野村 そうです。卒業後43年目に初めて開きました。

黒川 これまで一度も開かれなかったのは、やはり国大紛争の影響なのでしょうか。

野村 そうですね。それは勿論あると思います。なにしろ3月に卒業出来ず、4月から教育実習に行き、6月にやっと卒業しました。卒業式も無く、就職したのは早い人で7月、大部分の者は9月でした。職場に行っても事情を知らない人からは、何故3月でなく6月の卒業なのかと不審がられたりしました。

黒川 私が当時在職した小学校でも、9月に着任した国大の卒業生がいました。で、その後同期会を開こうという考えは誰からも出なかったのですか。私達のときには、卒後10年目に第1回の同期会をやったのですが。

野村 同期でも卒業後はいろいろに道が分かれたのです。勉強が足りないからと国大に残って翌年卒業という道を選んだ人もいます。ちょうど高度成長期にかかる頃だったので、職場でもそれぞれ忙しく、また少し経つと女性は子育てに忙しい時期を迎えたりして、同期会をやることなどは全く頭に浮かびませんでした。そもそも同期会は、普通には誰が企画して始まるものなのですか。

黒川 昭和35年卒業の私達の場合は、22の学科から1名ずつの委員がでて、その人達が全ての企画運営をし、これまでに8回の同期会をやってきました。ただ卒後10年目にやった第1回の同期会は誰が中心になって始め



同期会当日の45年卒の皆さん(H.25.11.30)

たのか、聞いてみたのですが分かりません。たぶん国大から卒業生の誰かに話が行って始まったのでは、ということです。あなた方の時には、国大そのものが大混乱だった時ですから、大学からの働きかけも当然無かったのでしょうか。大学からの働きかけが無かったとしても、友松会からの働きかけも無かったのですか。

野村 無かったのでしょうか。卒業後しばらくは、職場の先輩に言われて会費を出す程度で、友松会ともそれほど深いかわりはありませんでしたから、分かりません。でも考えてみると、今度の同期会は友松会とのつながりで実現出来たとも言えます。

黒川 それはどういうことですか。

野村 平成 15 年に緑区に赴任したら同じ区に 1 期先輩の三浦和弘さんが居られて、私の顔を見たら「いいところへ来た」と言われるのです。そう言われても何がいいところなのか私にはよく分からなかったのですが、つまり緑支部の支部長をやってくれということでした。

黒川 ははあ、後輩が来たから頼めると思ったのですね。

野村 支部長とはどんなことをすればよいのか訊ねましたら、「集金の係だ」と言うのです。私も会費を納めているので、「あゝそうか」と思いました。



国大清水が丘校舎

黒川 会費を集めるのも大切な仕事ですが、支部長の役割はそれだけではないのですがね。

野村 それで支部長会議に行ってみたら、小六の時の担任でとても影響を受けた先生がその会議に見えておられたので、「あ、この先生も友松会のメンバーだったのか」と思い、とても嬉しくなりました。そして区内の先生や先輩の先生方に会報を届けたりと、四年間仕事をしました。

黒川 横浜以外の支部では、OB の支部長も多いですからね。支部長会で恩師とご対面ということもあるでしょうね。でも、支部長をやったことと同期会とどう関係があるのですか。

野村 支部長をやっている時に友松会に同期会の組織を作る話が起って、当時この件を担当していた副会長の白石伸子さんから「同期会の組織の世話人をして下さい」と頼まれたのです。同期にはもっと偉い人がいるからと断ったのですが、結局引き受けることになりました。

黒川 その同期会の組織を作るのに参考にするとのことで、各期の代表の人に配って実情を調査するアンケートを作ったのですが、白石さんに頼まれて私もそのアンケートの項目作りに参加しましたよ。あれは平成 16 年か 17 年頃ですね。

野村 その同期会の世話人会が出来て集まる時は卒業期順に座るので、私の隣にはいつも昭和 44 年卒の高濱賢治さんが座りました。

すると高濱さんが「自分たちの期は、平成 7 年に 150 名の同窓生と十数名の恩師が参加して“幻の卒業式”をやった。」とか「卒業 40 年記念同窓会をやった。『友松』にも載っている。」とか、とても嬉しそうに語るのです。それを聞くと私はいつも「自分たちもそうしたいな」と思っていました。

黒川 成る程、そういう話を聞かされるとそう思うでしょうね。でも「そう思う」のと、実際に「そうやる」のとは大変な違いですが、まず同期生の名簿を作ることだって大変だったで

しょう。

野 村 私は国語科ですが、国語科の名簿についてはある程度分かっていました。というのは第一回のホームカミングデーの時に、45年卒の参加者は0人だったのです。その年は私も用事があったて行かれなかったのですが、0人と言われるとちょっと辛くて次の年には友人に手紙を書いて参加をお願いしたら3人来てくれました。

黒 川 そりゃすごい、三倍になったのですね。あ、違った、三倍じゃないね。0の三倍は0だから。

野 村 次の年に国語科の人にまた呼びかけたら10人近く集まってくれました。せっかく集まったのだから忘年会をやろうということになり、それから毎年国語科で忘年会とか新年会をやるようになったのです。だから国語科の名簿はかなり分かっていました。

黒 川 国語科は良いとしても、他の科の人の名簿はどうしたのですか。

野 村 後から同期会の世話人に加わった岡部 均さんが協力してくれることになりました。そこで岡部さんと同期生の名簿をどうやって作るか話し合ったのです。たしか平成24年の6月末だったと思います。

黒 川 その岡部さんと言う人は、何科なのですか。

野 村 岡部さんは物理科です。ですから岡部さんの線から、物理・地学・化学などの連絡が付く人が分かってきました。その他の科の人でも、サークルからたどっていくと同じサークルの美術科の人と英語科の人とも連絡が付きました。

また科によっては卒業後も定期的に集まっているところも有りました。例えば歴史科は学生時代の「歴史探訪の旅」を再現する計画があり、音楽科も年に一度集まるようになっていました。また体育科は卒業後20年のとき吉田さんが呼びかけ、最初は二年に一度、最近是一年に一度集まっているとのことで、これらの科からは連絡の取れる名簿を貰う事が出来ました。数学科は米満さんがはがきを郵送して調べてくれました。

黒 川 かなりはかどった感じですが、それでもまだまだですね。

野 村 その頃、友松会事務局にある会員名簿を見せてもらいました。平成の初め頃の名簿です。その名簿をもとに手紙で連絡したのですが、かなりの数が届かずに戻ってきました。でも名簿をもとに出したこの連絡は意味があったと思います。というのは無事についていた場合は現在そこに住んでいることが分かるし、届かなかったものは住所が変わっていると分かるからです。また名簿を見ることで、どの科にどんな人がいたか分かってきました。

黒 川 いまうかがっただけでもかなり大変な作業ですが、準備はこれだけでは済みませんね。最後まで野村さんと岡部さんと二人でやるわけにいかない、やはり実行委員のような人が何人か必要ですね。

野 村 そうなんです。だから初めに岡部さんと私の二人でしたことは、名簿を作っていく作業と同時に、自分たちの知り合いの中で各科の代表になってくれる人がいないか探すことでした。知っている限りの名前を二人で列挙して、準備委員になってくれそうな人をお願いをしました。そうしてOKしてくれた人達に集ま



懐かしきドンドン商店街

ってもらふ事にしたのです。それでも全ての学科からは準備委員を出すことが出来ないの
で、委員が出ていない科の人に、自分の科の友人に呼びかける「呼びかけ人」になってく
れるように頼みました。馴染みのない名前で会合のお知らせが行くよりも、知っている人
の名前で知らせが行けば貰った人も安心するだろうと思ったのです。

黒川 その準備委員会が発足したのは、いつ頃ですか。

野村 同期会準備会が発足して第1回の会合を持ったのは、平成24年の9月19日でした。でも
この時に集まったのは4名だけでした。

黒川 うーん、それだけの人数で会を企画運営するのはかなり難しいですね。

野村 第1回の会合の後、翌25年の2月までだいたい月に1回の会合を持ったのですが、出席
者はいつも3~4名でした。ところが、25年の3月の準備会には10名の人が集まりました。
この時点で岡部さんと私は初めて、「あ、10名集まればできるかな」と思いました。
その後はだいたい月に1回程度準備会を行って、4月には会計担当や各科連絡担当を決め、
6月の準備会では開催期日・会場を確定しました。
その後も毎月1回は準備会を開いて、案内状の発送や当日の会の内容などの話を詰めてい
きました。そして11月30日(土)の同期会当日を迎えたのです。

黒川 いやあ、話をうかがっているだけでも疲れますね。私はこんなに大規模な会の企画運営を
したことはありませんが、ごく小さな集まりでも中心になってやるというのはとても大変
なことです。だから私は最近、中学でも高校でも同窓会には出来るだけ参加するよう
にしています。幹事さんの苦勞に比べて、当日会費を出して参加するだけなのは楽ですから
ね。では当日のことをうかがいましょうか。会場は何処で、何名くらい参加したのですか。

野村 平成25年11月30日(土)の14時から16時半まで、崎陽軒ピアットを会場にして開催
しました。

黒川 その崎陽軒ピアットというのは、どこにあるのですか。

野村 横浜そごうの少し先の、横浜駅東口からちょっと離れた神奈川区栄町と言うところにあり
ます。



当時の京急南太田駅

黒川 当日の参加者はどのくらいだったのですか。

野村 370余名の同期生に案内状を発送しましたが、残念ながら
その内の77名は消息不明でした。当日の参加者は73
名です。参加者・不参加者を問わず、同期会に寄せられ
たお便りを「生きてるよ、みんなも元気でね！」と題し
て印刷し、一部は当日のプログラムにも載せました。

黒川 70名以上も集まったとはすごいですね。私達35年卒の
8期生は、前に述べたようにこれまで同期会を8回やり
ましたが、最後の8回目で270名に通知して集まったのは60名ほどです。で、当日の様
子はどうだったのですか。

野村 お店の従業員の方にも、「皆さん本当に楽しそうですね」と言われました。でも当日会場に
集まった同期生の中に流れていた空気は、とても言葉では伝えきれません。だが次の様な
ことを述べれば、当日の雰囲気も有る程度は分かってもらえるのではと思います。
一つ目は、昭和45年6月の卒業に当たって卒業式がなかったというより出来なかったこと
を「残念なこと」としてずっと心に深く秘めていた人がいて、その人が当時の河村学部

長の「卒業生に贈る言葉」を40年以上も大事に持っていました。それをコピーして当日皆さんに配ったのです。それは以下のような文章でした。

卒業する諸君におくる言葉 教育学部長 河村十寸穂

長期にわたった“紛争”のため、諸君の卒業は6月末という変則的な事態となった。そして昨年度にひきつづき、本年度もまた、従来のような“卒業式”を挙行しないで諸君を送り出すこととなった。(中略) このメッセージも、本来は、教職員・学生ともに一堂に会した席上で、諸君に語りたかったものである。(中略)

諸君が大学生活を通して学んだことがらは多いであろうが、少なくとも学問と真理を愛することが、その中心であったにちがいない。そして学問と真理を愛することによって人間は誠実さと謙虚さを身につけるはずである。これからの生活において、諸君はさまざまな矛盾を経験し、また困難に逢着するであろうが、人間の名において、誠実に生き抜いて欲しい。

諸君の卒業にあたり、愛惜の情をこめて、ここにささやかな一文をおくる。

1970年 6月 30日

このコピーを読む参加者の心には、あの大変だった国大紛争の時代がまざまざとよみがえり、苦しかった思い出と共に、若かった時代を回想して懐かしむ気持ちが心に浮かんだことでしょう。

二つ目は書道科の河野さんが「閉会の言葉」の中で述べた、次のようなことです。

「そもそも入学式の日、大きな立て看板がありアジビラを配っていて、学部名称変更闘争の匂いがプンプンしていた。しかも鎌倉の校舎は焼けてしまって、経済学部の校舎に間借りしている状態で、いや大変な所に来てしまったと思いました。そして3年生の終わりから統合問題



校門までの坂を登りきった辺りに、今でもある桜の老樹

を巡ってのストライキ、さらには封鎖がされ、私たちは大学構内に入れなくなりました。卒業の時はいつ終わったのか分からない形で終わりました。本当はもっと勉強をしたかったです。」この言葉に、うなずく人が多くいました。

最後は、この会が終わってから、参加者の一人から頂いた手紙に書いてあったことです。「はじめに御案内を頂いた時、自分の科の人は顔見知りだがそれ以外の人は知らないし、そんな大規模な集まりに行ってもどんな感じがするだろうか不安でした。でも行って見ると初めて会った人でも、学生時代に同じ時間を過ごしたと言うだけで、すぐ親しく話すことが出来て驚きました。楽しい時間を過ごすことが出来て、ありがとうございます。」という内容でした。おそらく参加した人たちは皆、同じ思いを持ったのだろうと感じます。

黒川 なるほど良く分かりました。その場になかった私でも、雰囲気は想像出来ます。

お話をうかがっていて私は、前川佐美雄の

・春の夜にわが思ふなりわかき日のからくれないや悲しかりける
という短歌を思い出しました。でもこの場合の“かなし”は「悲し」でなく、「愛し」でしょうね。

野村 当日参加出来なかった方からも、「今回はどうしても都合がつかなかったが次回は必ず参加する」とか、「案内を出すだけでも大変だったでしょう、ご苦労様。」とか温かいお便りを頂きました。また今回の集まりをきっかけにして、サークルや科の集まりをやるとういう話もでていようで、その点では一石を投じることになったかなと思います。私は日頃から出会った人の数が人生だと思っているので、今回こういう集まりを開く活動の中で学生時代は知らなかった人に何人も出会い、「あ、こんな素敵な人と一緒にの学年だったのだ」と思う事が出来て、とても嬉しかったです。同期の人たちとは、同じ時代に同じ場所で過ごしたという深いご縁があるのだと考えます。



清水が丘の国大キャンパス跡。今は高校があり、当時の外柵の一部だけが残っている。誠に「つわものどもが夢の跡」である。

黒川 参加した人たちが皆喜んでくれて、本当に良かったですね。ところで、終わったばかりなのに次のことを聞くのも申し訳ないのですが、この次にまたいつか同期会をやるとうお考えですか。

野村 今回の同期会をやるのにとってもエネルギーを使ったので、今後のことはまだ考えていません。一年くらい経った時に、協力してくれた準備委員の人達に集まってもらい、次のことを話し合おうかと思っています。

黒川 何も無いところから計画を立ち上げ、実行に移すという素晴らしい力を示した野村さんや岡部さん、それから準備委員の皆さんに敬意を表します。そして18期の同期会が今後ますます発展されることをお祈りいたします。今日はお話を聞かせて下さってありがとうございました。

同期の皆さんから、45年卒同期会に寄せられたお便りの一部をご紹介します。

- ・大阪に来て40年以上がたちました。南太田の坂、プレハブの校舎、青春の懐かしい思い出です。こちらでは専業主婦で元気にやっております。
- ・子供らも家庭を築き、主人もリタイアし、さてこれから二人で旅行三昧とか思っていたら、在宅で両親の介護をすることとなりました。ずっと楽をしてきたので、まあいいかというところです。
- ・小田原城北工高で数学の非常勤講師を週7時間(4日間)やっています。残りの日は農作業や散歩ですが、暇を持て余しています。
- ・平成14年9月30日、脳内出血により左半身不随の身になりました。リハビリに励みながら何とか暮らしております。皆様のご活躍、心より願っています。
- ・定年後、2年間ドイツの日本人学校で教え、良い経験をしました。帰国後、県立や市立高校で時間講師を2年間した後、世界一周の船旅を経験。30日は船の中です。
- ・現代童画会会員で、毎年秋上野の都美術館で現代童画展に出品しています。
- ・現在、公益法人生存科学研究所に勤務しております。横浜国大名誉教授の宮脇昭先生について、世界各国、日本各地の植樹に良く参加しています。
- ・退職後、児童相談所内にある一時保護所で小学生に勉強を教える学習講師をして6年目になります。
- ・大学から始めたランニングを、48年続けています。既に地球を6周と1/4走りました。

